

大学におけるダンス発表会の教育的意義 「現代的なリズムのダンス」授業の質保証に向けて

内 山 須美子¹

Educational Significance of Dance Recitals at Universities Toward Quality Assurance of “Contemporary Rhythmic Dance” Classes

Sumiko Uchiyama¹

Abstract

The purpose of this study was to clarify the educational significance of “dance recitals” as university classes, which are valuable opportunities to meet the demand for quality assurance of university education in our country these days. As a result of a quantitative survey using the dance flow scale and a qualitative survey using text mining as a method, it has been concluded that a dance recital is an important opportunity for university students to obtain well-being. Furthermore, in order for university students to achieve well-being in dance recitals, it has been found that it is necessary to “prepare a system of skills that gives a sense of subjective competence” in regular dance classes with “challenges involving optimal levels of stress” as the main learning task, and to adopt learning methods that “intervene in human relationships” for that purpose. The results also suggest that the establishment of a “system of skills,” “a learning method that enhances the level of skills,” and “a learning method that intervenes in human relationships” for contemporary rhythmic dance is a future challenge.

¹白鷗大学教育学部
e-mail : uchiyama@fc.hakuoh.ac.jp

1. 緒言

運動部活動の地域移行が進む中、活動継続が困難なほど部員数が少ない部活動がある中で、中学高校のダンス部の部員数はここ10年増加の一途を辿っている。中村ら（2014）が報告しているように、都立高校のダンス部女子の部員数は全ての部活動の中で1位となっているのはその証左でもあろう。ダンス部の部員数が他の部活動と比して極端に増加しているというこの現象を後押ししているのは、ストリートダンスのコンテスト、バトル、ショーケース、コレオなど、様々な形態で成果を披露する場が全国的に広がっているからである。その影響もあってか、WOD（ワールドオブダンス）、VIBE（パイブ）を筆頭に、ワールドクラスの大会で活躍する日本の小中高生も少なくない。日本中学校ダンス部選手権、ハイダン、JDC等の国内の大会も驚くほどのレベルの高さである。「ダンスを披露する場」というものが、若者の自己顕示欲求や表現欲求を強く満たしながら、日本のダンスのレベルを格段に押し上げているのである。

一方、学校現場に目を向けても、ダンスを披露する場は数多く存在する。近年では、表現運動・ダンス領域の内容の一つである小学校の「リズムダンス」や中学校の「現代的なリズムのダンス」を学級単位で発表する機会を提供する、内閣府・スポーツ庁・外務省主催の「全国小中学校リズムダンスふれあいコンクール」が開催され、年々隆盛を誇っている。また、全国の9割以上の幼稚園や保育園が開催する「生活発表会」や「お遊戯会」に加え、小学校での運動会は子ども達が日頃の成果を披露する重要なイベントとして位置づけられ、「発表会」はそこでも貴重な場を提供していることが報告されている（相浦ら，1989）。明治30年代に導入され昭和30年代まで盛んに踊られていた「学校ダンス（教材としての定型ダンス）」には、集団性の共有が可能であること、学校のアイデンティティを維持するという教育的意義があることが（永野ら，2011）、また、ダンス授業の単元の終わりにも、「学習成果を確認し、互いの良さを認め合い、次への意欲を高める」（中村，2015）ことをねらいとして「発表会」が位

置付けられてきたことは紛れもない事実である。

しかしながら、こうした発表の場におけるダンスの教育的意義は多くの教師が経験的に高く評価してきたものの、その意義についての詳細な分析はさほど見受けられない。たとえば、ダンスに対するポジティブなイメージの発揚の場であること（椀ら、2014）、貴重な体験の場、仲間との交流の場であること（北田ら、1995）、フロー経験の体験であること（小島ら、2012）が報告されている一方で、喜び、豊かさ、自己肯定感、感動、共感（原田ら、2013）や忍耐、協力（吉田、1976）やレジリエンス力の獲得（高橋、2018）などの心理的な成果の報告に留まってしまっているに過ぎない。加えて、これらの研究に共通しているのはいずれも数量的な分析に基づく研究であるということである。量的スケールを用いて測定するのみでは数量化することが困難な変数は研究対象から無視されることから明確にできない側面も存在すると考えられる。また、質的研究を用いたとしても、KJ法などによってデータの整理が行われてはいるが、その方法では分類結果が研究者によって異なる、という信頼性の問題が生じてしまうのである（藤井、2005）。そして、何よりも、出演者であり運営者でもある多数の受講者から成る、という特異な状況に置かれた大学を対象にした発表会の教育的意義について言及したものはこれまで見当たらないのが現状である。それゆえ、大学のダンス授業の受講者がダンス発表会の意義をどのように理解し、認識し、実践したかについての省察を分析することは、ますます増加するであろう中高のダンス部や部員達の受け皿として、さらには、幼稚園や保育園や小学校で実施されている「発表会」の企画・運営を担う指導者養成や教育の「質保証」（文科省）にとって大変重要な意味を持っていると考えられる。

以上のことから、本研究では、量的スケールを用いた調査と共に、アンケートにおける自由回答の分析などの未加工の文書情報(テキストデータ)群に含まれている傾向や相関関係などを発見するために最適なテキストマイニングを用いて、大学における「ダンス発表会」の在り方やダンス授業

のカリキュラムの自己点検・評価についての次なる年度に向けた新たな発見も含め、大学の授業としての「ダンス発表会」の教育的意義について分析・検討を試みるものである。

2. 研究の方法

2.1. 調査対象者

令和4年度白鷗大学教育学部「身体運動演習（表現運動）」受講者84名を調査対象者とした。ダンス発表会で感じる主観的恩恵や意義は、経験の有無や経験年数が大きく関与していることが予想されるので、回答が得られた84名から授業以外（ダンス部活動・スタジオレッスン等）のダンス経験者1名は分析対象から除外した。最終的に、分析対象者は83名（男性42名、女性41名）であった。

2.2. 調査内容

1) 基本的な属性

対象者の属性として、クラス、性別、ダンスの授業以外でのダンス経験の有無を尋ねた。

2) フローに関する調査項目

ダンス時の主観的な感覚を測定する尺度として、丹下（2015）が作成したダンスフロースケールDFS(Dance Flow Scale)36項目が挙げられる。指導内容の改善を目的としたダンス発表時の尺度としての有用性が示唆されている（小島ら, 2012）ことから、これを使用した。質問文は「発表会の中で一番楽しかった場面を思い出してください。その時のあなたの気持ちは次のうちどれに当てはまりますか」であった。回答方法は「全く当てはまらない（1）」から「非常に当てはまる（5）」の5段階で評定するよう求めた。なお、DFS36項目は表1のように再分類できる。分析には、この再分類も用いた。

表 1. フローに関する項目の分類（表中の項目番号は質問項目の番号である）

再分類番号	因子名	項目
1	自己目的的経験	1) 1 0) 1 8) 2 8)
2	最適水準	2) 9) 2 0) 3 3)
3	集中感	3) 2 1) 2 5) 3 1)
4	自意識の喪失	4) 8) 1 2) 1 5)
5	時間感覚の変容	5) 1 9) 2 3) 2 4)
6	明確な目標	6) 1 7) 2 2) 3 4)
7	即座のフィードバック	7) 2 7) 3 0) 3 2)
8	コントロール感	1 1) 1 3) 1 4) 3 6)
9	動きの自動化	1 6) 2 6) 2 9) 3 5)

3) ダンス発表会の感想

対象者に、出演したダンス発表会の演技のふり返りを行ってもらい、自由記述による回答を求めた。質問文は、「今回のダンス発表会での演技をふり返って、“ダンス発表会の感想”を書いてください」とした。

4) ダンス発表会の教育的意義

対象者に、出演したダンス発表会全般のふり返りを行ってもらい、自由記述による回答を求めた。質問文は、「今回のダンス発表会をふり返って、“あなたが感じたダンス発表会の教育的意義”を挙げてください」とした。

2.3. 調査方法

調査は、ダンス発表会の感想については、発表会終了後に「大学におけるダンス発表会の感想についての調査」と題したアンケートを、ダンス発表会の教育的意義については、「大学におけるダンス発表会の教育的意義についての調査」と題したアンケートをGoogleフォームにて配布し対象者に回答させた。

2.4. 調査対象としたダンス発表会の内容

令和4年度に2クラスで開講された「身体運動演習（表現運動）」の中で創作した2作品を、年末に開催された本学のダンス発表会で披露した。この発表会には、授業の受講者84名以外に、18年前から地域貢献活動として実施している「HAKUOHダンスアカデミー」に所属する小中高生（131名）、白鷗大学附属高校ダンス同好会生（12名）、本学ダンス部の学生と卒業生（計124名）が出演するとともに発表会の運営を担当した。

ダンス発表会の開催日時と場所、出演者数と観覧者数は以下の通りである。

日 時：2022年12月24日（土）16：00～18：00

場 所：HAKUOHホール（於：白鷗大学）

出演者：351名（この内84名が調査対象者）

観覧者：550名

2.5. 分析方法

基本的属性およびDFSの数量データについては、SPSS Statistics27を用いて単純集計および因子分析を行った。また、ダンス発表会の感想と教育的意義の文字テキストデータ（自由記述）は、PASW Text Analytics for Surveys3.0.1Jを用い、以下の手順にて実行した。まず、複数回に亘って読み込みを行い、文意を変えないように注意して、綴り間違い、入力ミスなどの修正を行った。続いてキーワード抽出（形態素解析）を行った。この結果を確認し、不統一な表現については類義語辞書に登録することでまとめ、それを反映したキーワード抽出を行った。抽出されたキーワードを用いて共起分析とコレスポンデンス分析を行った。

3. 結果

3.1. ダンス発表会のフロー感覚

DFS36項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行っ

た。固有値1を基準として3因子を抽出した。因子負荷量0.4未満、共通性が0.3未満の変数を除外した。因子の解釈には、因子負荷量0.4以上を対象とした。各因子の回転後の寄与率は、第1因子に41.32%、第2因子に7.90%、第3因子に5.41%であり、3因子による累積寄与率は、54.63%であった。結果を表2に示した。

表2. ダンスフロースケールにおける因子分析結果 (n=83)

		因子1	因子2	因子3	共通性
		運動有能感・動きの自動化	自意識の喪失	楽しさの感覚	
	寄与率	41.32%	7.90%	5.41%	
	アルファ係数	$\alpha=0.867$	$\alpha=0.864$	$\alpha=0.674$	
Q20	発表に必要とされたダンスの技能を十分持っていると感じていた。	0.77	0.03	-0.01	0.60
Q30	自分が上手に踊れることは分かっていた。	0.72	0.02	-0.15	0.46
Q26	動き(振り)は自然に起こっているように感じられた。	0.69	-0.24	0.29	0.53
Q16	踊っているとき何をしようかと考えなくても自然に正しい動きができた。	0.63	-0.08	0.16	0.45
Q9	私は友人と同じ程度の技術を持っていると信じていた。	0.60	0.11	0.02	0.48
Q33	私の踊りの技能と、発表に必要な技能は高いレベルでつり合っていた。	0.58	0.23	-0.14	0.47
Q35	考えることなく、無意識的、自動的に動いていた。	0.58	0.18	0.06	0.55
Q27	どのように上手に踊れるか、分かっていた。	0.49	0.16	-0.07	0.33
Q8	他人が私をどう見ているかなどは気にならなかった。	0.04	0.83	0.03	0.76
Q4	踊っている時、他人が自分をどう思っているか心配することはなかった。	-0.05	0.79	0.14	0.68
Q12	自分を心配することがなかった。	0.25	0.62	-0.01	0.65
Q28	私は本当に楽しかった。	-0.12	0.08	0.88	0.74
Q18	発表の時のフィードバックが素晴らしい、また味わってみたい。	0.04	0.00	0.79	0.66
Q34	私はダンスの発表で自分のやりたいことは何か強く意識していた。	0.05	0.19	0.40	0.30
因子相関	因子2	0.659	1	0.442	
	因子3	0.488	0.442	1	

第1因子には、表1に示された「最適水準」「即座のフィードバック」「動きの自動化」に分類される項目が混在していた。動きが自動化されていることから自分の技能に自信を持ち、うまく踊れているというフィードバックを受けていることが読み取れる項目であることから、この因子を「運動有能感・動きの自動化」と命名した。第2因子には、表1の「自意識の喪失」に分類される3項目が含まれるため、この因子を「自意識の喪失」と命名した。第3因子には、表1の「自己目的的经验」「明確な目標」に分類される項目が混在することから、この因子を「楽しさの感覚」と命名した。

第1因子と第2因子の相関係数が0.66であったことから、対象者にとっては、「発表に必要とされたダンスの技能」と「自分の動きに意識を向けなくてもよい状態まで自動化された技能」を身につけたことが、「他者が自分をどう思うかということに気にすることなくパフォーマンスに専念できた」と関連していると考えられる。このことから、対象者は、「運動有能感」があり「動きが自動化」していたから「発表に専念」できて「楽しさの感覚」が得られたと考えられる。

以上のことから、学習者がダンス発表会でフロー体験をするためには、指導者は学習者が「主観的な運動有能感」を感じられるレベルにまで、彼らの技能水準を高めなければならないと考えられる。対象とした授業では、発表会に向けて「ジャズ、ロック、ブレイク、ポップの技術」で構成された「振付」を創作、練習して発表作品としたことから、調査対象者が感じた「運動有能感」は、それぞれのジャンルの構成要素である「技能の習熟」と「振付の習得」に対する感覚であったと考えられる。一方、ダンス発表会のフロー体験については、主観的運動有能感から予測できる可能性が示されたものの、学習者に運動有能感を知覚させる技術体系については、今後も継続的に調査を進める必要があることが示唆された。

3.2. ダンス発表会の感想

3.2.1. 単語出現率

感想に関するカテゴリーについて、名詞、形容詞、動詞に注目してキーワードを抽出した。また、質問文に含まれる語（ダンス・発表会・演技・感想）および単独では明確な意味を持たない単語は除外した。出現頻度10以上を基準とし、16のキーワードを抽出した。結果を表3に示した。

表3. ダンス発表会の感想に関する形態素の頻度及び出現率(%)

	n	%
楽しい	60	74.1%
達成感	37	45.7%
不安もあった	27	33.3%
緊張・緊張感	26	32.1%
感謝・ありがとう	21	25.9%
素晴らしい	19	23.5%
感覚・感情	18	22.2%
感動	18	22.2%
気持ち良い	18	22.2%
難しさ	17	21.0%
自信を持った	17	21.0%
頑張った	15	18.5%
笑顔	14	17.3%
嬉しかった	14	17.3%
最高	12	14.8%
喜び	11	13.6%

抽出された16のワードは、菅原ら(2018)を参考にして、「他者志向的ポジティブ感情(感謝・ありがとう)」「自己志向的ポジティブ感情(楽しい・感動・嬉しい・最高・喜び・素晴らしい・気持ち良い・感謝・達成感・自信・笑顔)」および「ネガティブな感情(不安・緊張感・難しさ)」の3つのカテゴリーに分類した。

3.2.2. 共変関係

キーワードの出現頻度と共変関係(同時に出現する関係)について図示化を試みた。キーワードの●の大きさが出現頻度を表し、キーワードを結ぶ線の太さが同時に現れる回数の多さを表している。ここでは、キーワード抽出で得られた出現率30%以上のキーワードのwebグラフを作成し、図1、図2、図3、図4に示した。グラフには共通する回答5以上の線を表示した。

図1. 「楽しい (60)」

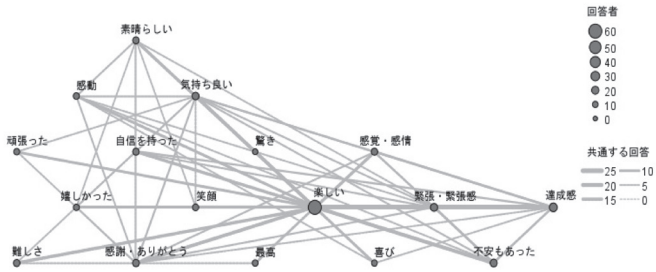


図2. 「達成感 (37)」

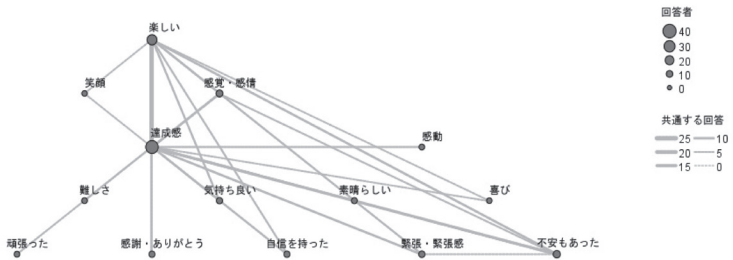


図3. 「不安もあった (27)」

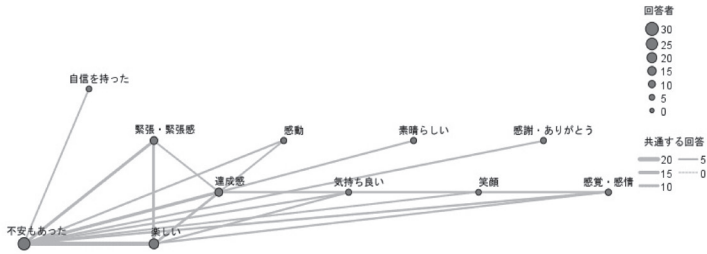
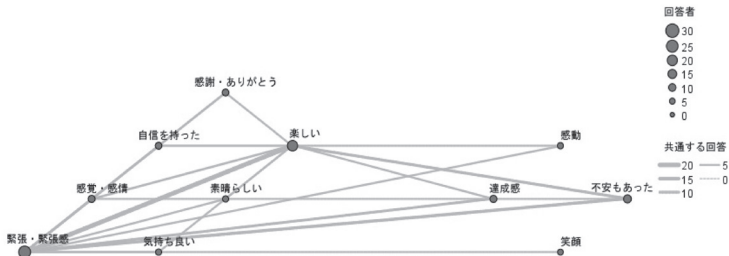


図4. 「緊張・緊張感 (26)」



「楽しい」と最も多く共起したのは「緊張・緊張感」「達成感」であり、次に、「不安もあった」「素晴らしい」「気持ち良い」「感謝・ありがとう」「感覚・感情」といったキーワードが見受けられた。また、「達成感」と最も多く共起したのは「楽しい」であり、次に「素晴らしい」「不安もあった」「感覚・感情」といったキーワードが見受けられた。一方、「不安もあった」と最も多く共起したのは「楽しい」であり、次に「緊張・緊張感」と「達成感」が続き、数は多くはないが「自信を持った」「感動」「素晴ら

しい」「感謝・ありがとう」「気持ち良い」「笑顔」といったキーワードとも共起していた。また、「緊張・緊張感」と最も多く共起したのは「楽しい」であり、次に「不安もあった」と「達成感」であり、数は多くはないが「自信を持った」「感動」「素晴らしい」「感謝・ありがとう」「気持ち良い」「笑顔」といったキーワードとも共起していた。そこで、ポジティブなキーワード同士、ネガティブなキーワード同士、ポジティブなキーワードとネガティブなキーワードの共起の仕方を、実際の文脈から検討することにした。

先ず、ポジティブなキーワード同士の共起の仕方について検討した。その結果、「楽しさや達成感」「気持ちが良かったし楽しかった」「喜びは素晴らしい」というように並列に並ぶ単語として共起する場合が多かった。また、ネガティブなキーワード同士の共起の仕方も、「とても不安で緊張していましたが」「不安や緊張は無く」「緊張や不安もあったが」というように並列に並ぶ単語として共起する場合が最も多かった。次に、ポジティブなキーワードとネガティブなキーワードとの共起の仕方を検討した。「不安・緊張」が「楽しい」と共起している文章を見ると、「とても不安で緊張してましたが、全力で楽しく踊ることが出来て」、「でも、実際に本番大勢の人の前で踊ってみると、不安や緊張は無く、『楽しい!!』と感じていました」「発表会本番では緊張や不安もあったが終始笑顔で楽しく踊りきることができた」というような出現の仕方で、演技が始まる前のネガティブな感情が、ステージでの演技が始まるとポジティブな感情に変わったことを示す内容が最も多かった。

さらに、「楽しさ」以外のポジティブな感情との文脈を見てみると、「観客の前で踊ることは初めての経験だったので不安でしたが、体は勝手に動くし、自然に笑顔になった」「練習の段階では、不安や難しいというネガティブな気持ちが多々あったが、練習を重ねていくうちに自分の踊りに自信がもてるようになり」、「不安なことなく全力でダンスに取り組めたことはこのような方々の裏での努力があったからです。運営の方々の対応

の丁寧さにも感動しました」「本番前には緊張と不安でいっぱいになりました。しかし、本番直前、一緒に練習してきたみんなと励ましの声を出し合って頑張ったことに感謝の気持ちでいっぱいになりました」「不安と緊張でいっぱいだったが、大変なものほど、得た時の喜びは素晴らしい」「緊張や不安が大きかった分、最高に気持ちの良い、ワクワクが止まらない体験だった」というように、ネガティブな気持ちがポジティブな気持ちの前提になっていることが窺えた。

これらの文章からは、対象者がストレスを克服してポジティブな感情を獲得したことが読み取れる。ダンス発表会は、出演者にとって、2つの面から心理的に危険な状態に追い込まれる機会である。ひとつは、「これまでの努力の成果をうまく発揮できるか」という面、もうひとつは、「たくさんの観客の前で失敗をして恥をかかないか」という面である。当然、「うまくやれるか」「失敗しないか」「これまでの努力を無駄にするのではないか」「失敗して仲間に迷惑をかけるのではないか」といった不安や緊張が発生する。調査対象者の全文章を確認したが、「ストレスに押しつぶされた、負けた、克服できなかった」という類の文章は認められなかった。青砥（2021）は、ストレスを「ダークストレス」と「ブライトストレス」に分け、後者は我々の成長や幸せに貢献するものだととして、次のように述べている。

「苦難に立ち向かい、挑戦し続け、挫折や失敗などを繰り返しながらも、前を向き諦めずにやり遂げた、そんな時に、大きな感動が生まれます。忘れてはならないのは、その過程において、多大なストレスがかかっているということです。ストレスがかかっていたからこそ、大きな感動は生まれます。逆に、ストレスなくして成し遂げたことは、本質的な感動にはなりませんし、強くあなたの脳に刻まれることもありません。さらに大きな感動を生むだけではなく、その過程で味わったストレスにより、学びが促進され、大きく成長し、強くなるのです。…ストレスは間違いなく私たちを大きく成長させてくれます。むしろ私たちの脳や身体のシステムにスト

レス反応が備わっているのは、成長を促す為ともいえます。単に害しかなく、意味のないものであるなら、とっくに進化の過程で淘汰されているはずです。」(p.55)

この青砥の言明から考えると、ストレスは、学習者の学びを促進し、自己の成長と幸福感を感じるために必要な要因だと言えることができる。また、マグゴニガル(2020)は、挑戦度が高いほど、より強烈な高揚感(フィエロ)が得られるとして、次のように説明している。

「フィエロは、我々が経験する中で最も強い脳科学的な高揚感のひとつ。誰もが同じ動作、両手を頭上に高く上げて快哉を叫ぶポーズをすることから、人類の最も根源的な感情に関連している」(pp.55-57)

これは、今回の調査対象者達にも見られた光景である。パフォーマンスが終了してすぐ、ステージ上で手をあげてガッツポーズをして観客に応えていたことは、強烈な高揚感(フィエロ)を得ていたことの証左である。挑戦の水準について、コトラー(2015)は、フローが感じられるためには、現在の実力を4%以上超える必要があるとしている。これらのことから、ダンス発表会で、学習者がストレスに押しつぶされることなくフローやフィエロを感じられるためには、授業の学習課題としては「最適水準のストレスを伴う」「挑戦」を促すレベルの内容にする必要があると考えられる。回答と調査対象者らのステージ上での様子から、今回の作品内容(技術体系と振り付け内容)のレベルは、調査対象者にとって、ブライトストレスを伴う最適水準の挑戦であったと言える。

3.2.3. コレスポンデンス分析

コレスポンデンス分析とは、反応パターンの似たもの同士が近くにくるように、カテゴリデータに数量を与え、カテゴリ間の関係を視覚的にとらえるための手法である。今回は、テキストマイニングしたデータを01型

(そのキーワードがあれば1、なければ0)で表しているのので、原点(0、0)付近のキーワードは多数意見、原点から離れているキーワードは少数意見と読み取ることができる。第2次元までを抽出して布置図を作成した。インナーシャの寄与率から、第2次元までで元のデータの21.8%を説明していることがわかる。結果を図5に示した。

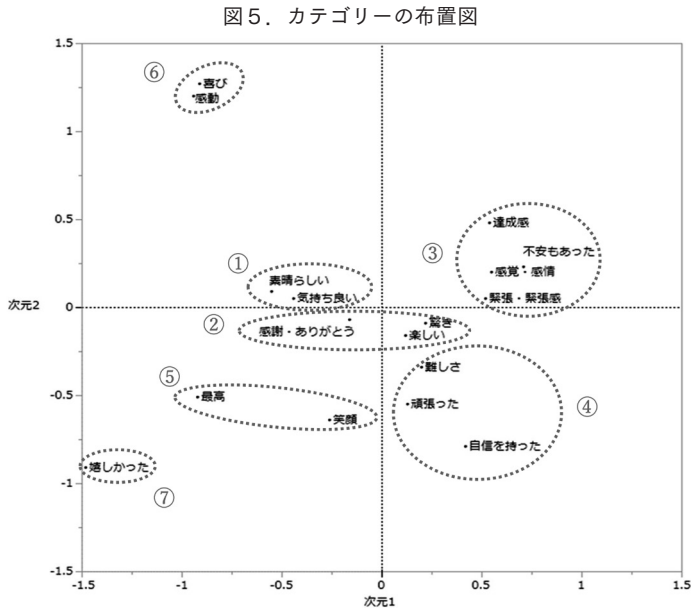


図5のキーワードの布置図をみると、調査対象者は、おおむね以下の7つのグループに分類することができた。なお、性別、クラスでの差は認められなかった。

- ①「気持ちの良い」「素晴らしい」経験だった。
- ②「感謝・ありがとう」「楽しさ」「驚き」の気持ちを持った経験だった。
- ③「緊張・緊張感」や「不安もあった」が成し遂げた「達成感」が大きい経験だった。

- ④「難しさ」があったが「頑張った」ことで「自信を持った」経験だった。
- ⑤「最高」な気分と「笑顔」を伴う経験だった。
- ⑥「感動」や「喜び」を感じる経験だった。
- ⑦「嬉しかった」経験だった。

大多数が「自己志向的ポジティブな感情」と「他者志向的ポジティブ感情」である「感謝」を感じていることが認められた。

3.3. ダンス発表会の教育的意義

3.3.1. 単語出現率

教育的意義に関するカテゴリーについて、名詞、形容詞、動詞、に注目してキーワードを抽出した。また、質問文に含まれる語（ダンス・発表会・教育的意義）および単独では明確な意味を持たない単語は除外した。出現頻度10以上を基準とし、44のキーワードを抽出した。結果を表4に示した。

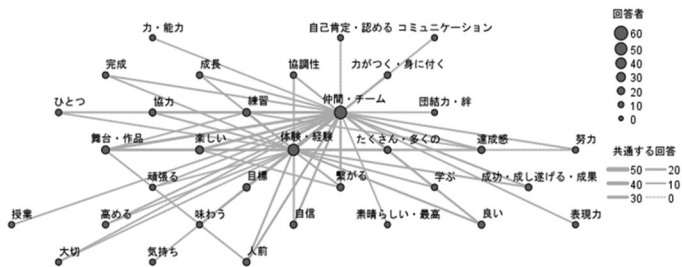
表4. ダンス発表会の教育的意義に関する形態素の頻度及び出現率 (%)

	n	%
仲間・チーム	52	67.5%
自信	32	41.6%
練習	31	40.3%
楽しい	31	40.3%
舞台・作品	30	39.0%
人前	27	35.1%
達成感	27	35.1%
良い	26	33.8%
目標	24	31.2%
成功・成し遂げる・成果	23	29.9%
たくさん・多くの	23	29.9%
繋がる	22	28.6%
味わう	19	24.7%
力がつく・身に付く	18	23.4%
成長	18	23.4%
努力	18	23.4%
高める	17	22.1%
挑戦	16	20.8%
授業	16	20.8%
協力	16	20.8%
表現力	15	19.5%
ひとつ	15	19.5%
大切	15	19.5%
気持ち	15	19.5%
完成	14	18.2%
素晴らしい・最高	14	18.2%
自己肯定・認める	14	18.2%
学ぶ	14	18.2%
向かう	14	18.2%
力・能力	13	16.9%
協調性	13	16.9%
頑張る	13	16.9%
嬉しい・喜び・感動	12	15.6%
団結力・絆	12	15.6%
普段	12	15.6%
本番	12	15.6%
やる気・意欲	11	14.3%
技術	11	14.3%
コミュニケーション	11	14.3%
過程	11	14.3%
機会	11	14.3%
感情	10	13.0%
積極的・自主的	10	13.0%
緊張・緊張感	10	13.0%

3.3.2. 共変関係

ここでは、キーワード抽出で得られた出現率40%以上のキーワードのwebグラフを作成したところ、「楽しい」「練習」「自信」が20回以上共起したカテゴリは「仲間・チーム」であったことから、「仲間・チーム」からの共変関係のみを図6に示した。グラフには共通する回答10以上の線を表示した。

図6. 仲間・チーム (52)



最も出現回数の多い「仲間・チーム」と「楽しい」「練習」「舞台・作品」それぞれのキーワードがどのような共起の仕方をしているのかを、実際の文脈で確認した。

「楽しい」については、「チームのみんなと協力して一つの課題を達成することによって自他共に認める力や協力することの楽しさを知ることができます」「仲間とやっていくうちに自然と内発的動機付けとしての楽しさに変わっていくと思う」「仲間意識が強まっていったりすることで楽しいという内発的動機づけへ移行していく」「仲間と困難を乗り越えながら『楽しい』と感じることが『成長』にも関わることだと学ぶ」「やはり発表会があると設定することによって、そこへ向かう気持ちが仲間同士でどん

どん勢いづいていくため、自分たちで自然と『頑張ろう』『楽しもう』と思わせてくれる」など、「この楽しさは仲間と一緒にだからこそ獲得された」ことを示す共起の仕方がほとんどであった。

「練習」については、「発表会のための仲間との事前準備や練習、コミュニケーションは自分を成長させるための材料」「練習はもちろん本番を仲間みんなで挑み、また達成感を得ることでやりきる力が身につく」「練習にチームで取り組めば、仲間意識の大切さと練習の大切さを知ることができる」「二つ目はチームや仲間との一体感の強まりです。練習はもちろん本番をみんなで挑み、また達成感を得る」「上手くなりたいと練習に取り組むと、向上心も高まりチームで取り組めば仲間意識や団結力が育まれる」というように、発表会以前の授業や課外での練習を「仲間と一緒に取り組んだ」ことを示す共起の仕方が多く見られた。

「舞台・作品」については、「一緒に舞台に立つ仲間以外にも、準備に携わってくれた様々な方々の援助も含まれる」「一緒に舞台に立ち頑張ってきた仲間に大変感謝している」「自分たちにとって発表会のような大舞台を体験することは、舞台を成功させた達成感や仲間と協力して何か成し遂げる充実感を味わうことができる」「大変な練習や緊張などの感情の中で仲間と作品を完成させられたことやダンスの中で自分を表現できたことなどの達成感、「チームの仲間と1つのcrewになり1つの作品を完成させるために全力を尽くし、」といったように、「仲間と共有したもの」として捉えられていることが窺えた。

これらのことから、「仲間・チーム」というキーワードは、授業中の「練習」のプロセスと「作品」を発表した「舞台」、この両方に関係していると考えられる。それ故、調査対象者は、ダンス発表会の楽しさは、「プロセス（授業）」と「結果（発表会）」を「仲間」と共有したことから生まれたと捉えていることが示唆された。

3.3.3. コレスポンデンス分析

第2次元までを抽出して布置図を作成した。この図では、イナーシャの寄与率から、第2次元までで元のデータの12.6%を説明していることがわかる。結果を図7に示した。

図7. カテゴリーの布置図

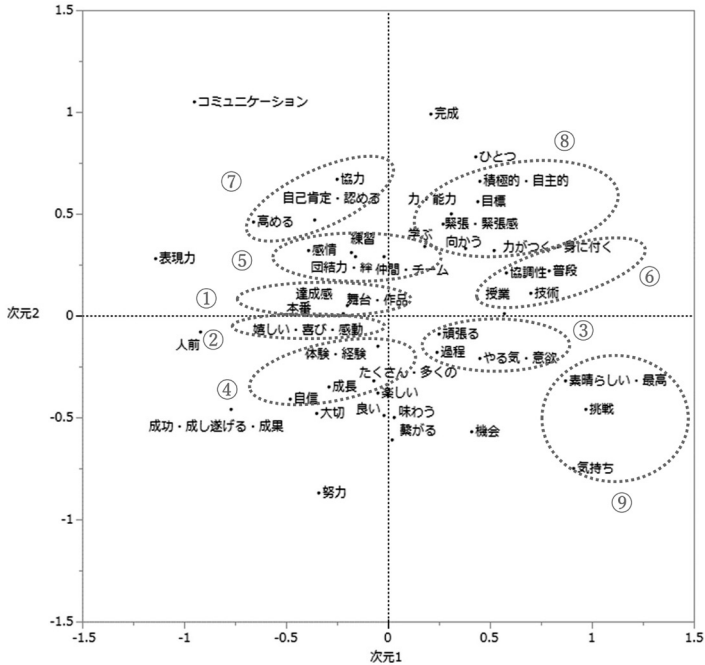


図7のキーワードの布置図をみると、おおむね以下の9つのグループに分類することができた。なお、性別、クラスでの差は認められなかった。

- ① 作品を発表した舞台（本番）で「達成感」を感じる。
- ② 「嬉しさ・喜び・感動」が体験できる。
- ③ 「頑張る」過程で「やる気・意欲」がでる。
- ④ 多くの体験や経験で「自信」が付き「成長」につながる。

- ⑤本番に向けて練習することで「仲間・チーム」との「団結力・絆」が深まる。
- ⑥発表会があることで普段の授業のプロセスで「技術」や「協調性」が身につく。
- ⑦仲間と協力したりお互いを認めたりすることで「自己肯定感」が「高まる」。
- ⑧目標に向かうことで、色々な能力や力（積極性・自主性・緊張感など）が身につく。
- ⑨「挑戦」することで「素晴らしい・最高」という「気持ち」になる。

主観的に感じられる教育的意義として、「達成感」「ポジティブ感情」「やる気・意欲」「自信・成長」「団結力・絆」「技術」「協調性」「自己肯定感」「積極性・自主性」「挑戦」といったカテゴリーが抽出された。それぞれのカテゴリーは、含まれたキーワードの意味内容について考慮すると、「個人で完結する意義（①②③④⑥⑦⑧⑨）」と「人間関係を包括する意義（⑤⑥⑦）」に分類することができた。

キーワード抽出で最も頻出したキーワードが「仲間・チーム」であること、共起分析で、発表会の楽しさは「仲間との」作品の共有・練習から捉えられていること、そして、コレスポネンズ分析から「人間関係を包括する意義」というカテゴリーが得られたことから、ダンス発表会の教育的意義は、フローやフィエロといった「個人で完結するポジティブ感情」のみで説明することはできないと考えられる。

4. 総括

4.1. ダンス発表会のフロー感覚

DFS36項目を用いた調査から、調査対象者は有能感を感じ、ダンスに没頭し、楽しさを伴うフロー体験をしていたことが明らかとなった。フロー概念の提唱者であるチクセントミハイは、自分を忘れるほどのめり込める瞬間こそが「幸せ」の正体だと述べている（チクセントミハイ，1996）。

また、Seligman (2002) は、快樂には一時的な効果しかないが、フロー経験がもたらす満足感には「長期的な効果」があるとし、さらに、浅川 (2011) は、フロー経験は能力や技能を伸ばすだけでなく、対象に対する肯定的な態度や思いを形成すると述べている。ダンス発表会のフロー経験は、ダンスへの肯定的な思いを育て、学習の継続性と成長を保障する意義ある機会と言えらるだろう。

近年では、セリグマン (2014) によって、フローは人間の幸福を構成する重要な要素として注目されているが、彼の幸福理論では、フローは「ポジティブ感情」ではあるが、「エンゲージメント」と深く関連することから「楽に得られるポジティブ感情」と区別される必要があるとして次のように述べている。

「エンゲージメントとはフローに関することだ。…エンゲージメントはポジティブな感情ではないし、むしろポジティブ感情を得られないという点ではその逆でさえある。…フロー状態を得るための近道はない。それどころか、自分の最高の強みや才能を発揮しなければフローの世界に与かることはできない。ポジティブ感情を得るには楽な近道もあるのだが、それがエンゲージメントとポジティブ感情のもう一つの違いでもある。」(pp.25-26)

フロー体験を伴うダンス発表会は、高いエネルギーと集中力で生き生きとエンゲージメントする「やりがい・生きがい」のある機会としても捉えられるだろう。ダンス授業の集大成と言えらる発表会で、ダンスへの好意や生きがいに繋がるフロー体験をさせるためには、運動有能感を感じらるほどの動きの自動化が必要なことから、「現代的なリズムのダンスの技術体系の確立」を今後の課題とした。

4.2. ダンス発表会の感想

「感想」に対するテキストマイニングの結果から、不安や緊張といった

ストレスを克服して様々なポジティブ感情を得ていたことが明らかとなった。フレドリクソン（2010）の「拡張－形成理論」において、フローを始めとするポジティブ感情は精神の働きを拡張し、利用できる身体的、創造的、知的、心理的、社会的な資源や能力を形成することが示されている（pp.45－55）。ダンス発表会は自己形成のためのリソースを得られ、これらのリソースを形成することによって好循環サイクルをつくることができ、人間としての成長を約束する意義ある機会と言えるだろう。ダンス発表会におけるポジティブ感情の体験は、学習者が感じるストレスから予測できる可能性が示されたことから、学習者にとって最適な「挑戦」水準について、今後も継続的に調査を進めることを課題とした。

4.3. ダンスの教育的意義

「教育的意義」に対するテキストマイニングの結果からは、感謝といった「人間関係を包括するポジティブ感情」と、団結力、絆、協調性といった「人間関係を包括する意義」というカテゴリーを抽出することができた。マクゴニガル（2020）は「向社会感情（愛情、思いやり、称賛、献身などの他者に向けられる心地よい感情）は、長期的な幸福を実現するために必要なもの」（p.120）としている。また、白井（2020）は、予測困難な今日および将来において、持続可能な社会を形成していくためには個人と社会双方のwell-beingを目指すことが重要であり、「共同エンジェンシー（教師や仲間との教えと学びの協働）」は個人と社会のwell-beingの指針となると述べている。

セリグマンのPERMAモデルでは、「幸福」は「well-being」と捉えなおされ、「ポジティブ感情（P：Positive emotion／明るい感情）」や「エンゲージメント（E：Engagement／没頭、夢中、熱中）」といった主観的な変数だけでなく、援助、協力、意思疎通といった「関係性（R：Relationship／他者とのよい関係）」、人生の意義、社会貢献、利他行為といった「意味・意義（M：Meaning／人生の意義の自覚）」、達成、成果、自己効力感と

いった「達成 (A: Accomplishment/達成感)」などの認知的で理性的な側面も含めて、well-beingを多面的に評価している。そして、彼が主観的well-beingを高めるものとして「社会的な人間関係」が最も重要なものとして捉えていることは、彼の次のような言葉からも理解できる。

「ウェルビーイングの要素の場合には、最初の幸福理論のように、ポジティブ感情、エンゲージメント、意味・意義をめぐる思考や感情についての自己報告にとどまらない。…ポジティブなもので孤独なものは実に少ない。…人生におけるこうした素晴らしい出来事について、その一つひとつの詳細を知らなくとも、それがどのような形であったのか私にはわかる。その出来事はすべて、他の人がいるところでは起きはずだからだ。」(セリグマン, 2014, pp.32-41)

今回の調査対象者が、教育的意義として、「個人で完結するポジティブ感情」とともに、感謝・協力・団結力・絆・協調性といった「人間関係を包括する意義」を挙げていたことから、ダンス発表会は、「楽しさや喜び」といった主観的なポジティブ感情の知覚に止まるものではなく、well-beingの機会であると言えることができるだろう。

一方、ダンス授業の集大成と言える発表会でwell-beingを感じさせるためには、ダンスの授業の中で「学習者の人間関係」に介入する必要があることから「人間関係に介入したダンスの学習方法の確立」が今後の課題となるだろう。

5. 結論

本研究は、昨今の我が国の大学教育の質保証に応えるための貴重な機会である、大学の授業としての「ダンス発表会」の教育的意義を明らかにすることを目的とした。DFS (Dance Flow Scale) を用いた量的調査とテキストマイニングを方法として質的調査を実施した結果、ダンス発表会は、大学生にとってwell-beingが得られる重要な機会であると結論づけら

れた。さらに、大学生がダンス発表会でwell-beingを得るためには、通常のダンス授業において「主観的有能感を感じさせる技術体系を準備」するとともに、「最適水準のストレスを伴う挑戦」を主たる学習課題とし、そのためには「人間関係に介入」する学習方法を採る必要があることも明らかとなった。一方で、これらの結果から、現代的なリズムのダンスの「技術体系」「技能水準を高める学習方法」「人間関係に介入した学習方法」の確立が今後の課題であることも示唆された。

冒頭で示した、ストリートダンスのコンテストやバトルが、そして、ダンス部活動入部者が増え続けているのは、それが、若者を夢中にするポジティブな感情と人間関係を伴う意義のあるかけがえのないwell-beingの機会だからある。ダンスは見るものと見られる者の境界をなくし、祈りや自然への畏怖をささげる祭りの中で踊られてきた。調査対象者の一人が述べていた、「もう終わってしまうのか…と思うと寂しい気持ちになった。みんなともっとずっと踊っていたかった」という言葉は、身体のリズム同期から生まれる「集会的沸騰 (collective effervescence)」(デュルケーム, 1975) が、共同体に属するメンバーの間に離れがたい「絆」を生み出すことの証左とも言えるだろう。日本の子どもの幸福度は、身体的健康は1位でありながら、精神的幸福度は37位という最下位に近い結果であることが報告されている (Unicef, 2020)。このような日本の現状において、ダンスコンテストやダンスバトルはもちろん、大学におけるダンス発表会は、well-beingをもたらす教育ツールとして大きな意味を持つばかりか、その開催は大学生にとっても貴重な体験の場となるだろう。

謝辞

本研究で分析対象としたダンス発表会は、白鷗大学教育科学研究所の事業助成金を用いて行われた。記して謝意を表する。

文献

- ・青砥瑞人(2021) HAPPY STRESS：ストレスがあなたを進化させる。SBクリエイティブ株式会社。
- ・浅川希洋志(2011) フロー理論に基づく「学び浸る」授業の創造—充実感をともなう楽しさと最適発達への挑戦。学分社。
- ・相浦雅子・大元千種(1989) 保育における行事に関する調査(1)生活発表会について。日本保育学会大会研究論文集。pp.350-351。
- ・チクセントミハイ.M.：今村浩明訳(1996) フロー体験：喜びの現象学。世界思想社。
- ・コトラー.S.：熊谷玲美訳(2015) 超人の秘密：エクストリームスポーツとフロー体験。早川書房。
- ・デュルケーム.E.：古野清人訳(1975) 宗教生活の原初形態(上)。岩波文庫。
- ・藤井美加(2005) テキストマイニングと質的研究。藤井美加・小杉孝司・李政元(編) 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門。中央法規。pp.14-28。
- ・フレドリクソン.B.：高橋由紀子訳(2010) ポジティブな人だけがうまくいく3：1の法則。日本実業出版社。
- ・原田純子・白井麻子(2013) ダンス発表会の教育的意義についての一考察。舞踊學36。p.133。
- ・椛ちか子・長野真弓・松崎守利(2014) ダンスの「発表」が気分・感情に及ぼす影響—体育専攻学生を対処とした検討—。スポーツパフォーマンス研究6。pp.143-160。
- ・北田和美・金子嘉徳(1995) 運動会におけるダンスの教育的意義。日本体育学会大会号46(0)。p.670。
- ・小島理永・野村照夫・来田宣幸(2012) 高等学校ダンス発表会時におけるフロー体験の検討—ダンス・フロー・スケールの開発に向けて—。スポーツパフォーマンス研究4。pp.44-58。
- ・マグゴニガル.J.：藤本徹・藤井清美訳(2011) REALITY IS BROKEN幸せな未来はゲームが創る。早川書房。
- ・永野順子・安広美智子(2011) 運動会における「学校ダンス」の現代的意義。比較舞踊研究17。pp.25-35。
- ・中村恭子(2015) 8. 発表・鑑賞から次へつなげる：全国ダンス・表現運動授業研究会(編) みんなでトライ表現運動の授業。大修館書店。p.141。
- ・中村なおみ・勢畑多恵子・布施典子(2014) 高等学校におけるダンス部の活動実態及び部員の意識調査：東京都における急増するダンス部の現状と課題。日本女子体育連盟学術研究30。pp.69-79。
- ・Seligman, M.E.P. (2002) Authentic happiness : Using the new positive psychology to realize your potential for lasting fulfillment. New York : Simon&Schuster, Inc.
- ・セリグマン.M.：宇野カオリ訳(2014) ポジティブ心理学の挑戦：“幸福”から“持続的幸福”へ。ディスカヴァー・トゥエンティワン。pp.35-37。
- ・白井俊(2020) OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来：エージェンシー：資質・能力とカリキュラム。ミネルヴァ書房。
- ・ソーヤー.K.：金子宣子訳(2009) 凡才の集団は孤高の天才に勝る。ダイヤモンド社。
- ・菅原大地・武藤世良・杉江征(2018) ポジティブ感情概念の構造：日本人大学生・大

大学院生を対象として、心理学研究10、pp.28-42.

- ・高橋和子(2018)創作ダンスの発表がレジリエンスに与える影響. 静岡産業大学スポーツと人間3(1). pp.85-96.
- ・丹下理永(2015)現代的なリズムのダンスにおける楽しさと感情表現に関する研究. 京都工芸繊維大学大学院博士論文.
- ・Unicef(2020)ユニセフ報告書「レポートカード16」先進国の子どもの幸福度をランキング:日本の子どもに関する結果.
- ・吉田友子(1976)恒例のダンス発表会. 大阪教育大学附属高等学校池田校舎研究部研究紀要9. pp.33-41.

